

企画展

おひなさま

春らんまん、桃の節句におひなさまを飾ってお祝いするひな祭りは、女の子の成長を喜ぶお祭りです。その歴史は古く、古代にさかのぼります。平安時代の宮中では、幼女が季節を問わず行う雛遊び(人形あそび)が行われていました。一方、人の穢れや罪を形代(人形ひとがた)に移し、身を清める“祓い”というものがあり、旧暦3月の巳の日に行う祓いを「巳日祓」と言いました。やがて、これらの行事は融合し、江戸時代半ばになると、3月3日に雛人形を飾ってお祝いする、現在のような“ひな祭り”へと展開しました。

本展では、江戸時代に福井藩の藩医を務めた三崎玉雲家に伝来した京製の古今雛を中心に、多種多様な日本の人形の魅力を紹介します。



立雛

雛人形の原型は、人に代わって心身の穢れや罪を移す形代(人形)で、男女一対の立姿をしています。立雛は、主に紙製で作られた胴体に頭が挿し込まれた素朴な造りで、紙雛とも呼ばれます。雛人形のもっとも古い形式ですが、長く愛され、江戸時代を通じて作られました。

平安時代の『源氏物語』などで描かれる「雛遊び」では、このような立雛が用いられていたと考えられます。

図1 立雛 (I-1635 東京国立博物館所蔵) 男雛46cm 女雛33cm 立雛は雛人形の古い形式ですが、この作品は、頭に髪が植えられていることや、別造りの冠、衣裳の装飾などから、江戸時代後期以降の作と考えられます。



室町雛

“坐姿”的雛人形のうち、もっとも古い形式が

室町雛です。室町雛は、丸い頭に引目鉤鼻の表情を持ち、手先はまだ無く、女雛は袖を開いた姿で表されます。これは前代の“立雛”的姿と共通し、簡素な古い様式が残っていると考えられます。

「室町」という呼称は、雛人形の中でも古い形式であるということを示しており、作られた時代と一致するわけではありません。室町雛の形式は、江戸時代前期には成立していたと思われますが、それ以前にさかのぼる作品は残っていません。



図2 山東京伝『骨董集 下』(京都大学附属図書館所蔵)
部分 文化11、12年(1814、15)刊
江戸時代後期の浮世絵師・戯作者の山東京伝が記した『骨董集』に描かれた「室町家の頃の雛図」が「室町雛」の由来です。

寛永雛

寛永雛は、室町雛の丸い頭を面長にして、男雛は冠と頭部を一体にした共造りで、女雛は小袖袴で袖を開いた姿、また10cm程度の小ぶりなサイズといった特徴があります。町方で好まれたもので、室町雛に次いで古い形式ですが、寛永時代(1624～44)に作られたというわけではありません。



享保雛

享保雛は、寛永雛の流れを汲み、面長の頭に別作りの冠をかぶり、手先が付けられ、袖は内側を向いています。また、衣裳に手間がかけられ、男雛は袖や袴を直線的に強調した角張ったシルエット、女雛は五衣の袖に綿が厚く入れられてボリュームが強調されています。

町方で長きにわたって愛好され、小ぶりで素朴な造りの古式享保雛と呼ばれるものから、50cmを超える大型のものまで見られます。享保時代(1716～1736)を含む、長い期間にわたって作られました。

図3 享保雛 (I-1579 東京国立博物館所蔵) 江戸時代中期(18～19世紀) 男雛36cm 女雛36.5cm

じろうざえもんびな 次郎左衛門雛

次郎左衛門雛は、丸い頭に「引目鈎鼻」の表情が特徴で、京の人形屋・雛屋次郎左衛門の名に由来しています。雛屋次郎左衛門は、宝暦（1751～64）頃に江戸店を開いて幕府の御用を務め、大名や幕府役人の名鑑である『武鑑』にもその名が確認できます。次郎左衛門雛は、宝暦頃にはその様式が完成し、上級武家と公家の両者で長く重用されました。



図5 有職雛 和宮所用（国立歴史民俗博物館所蔵）江戸時代末期（19世紀）男雛は公家の日常着である直衣姿、女雛も桂に袴を付けた軽い装いです。金蒔絵の精巧な雛道具を伴っています。

ゆうそく 有職雛

有職雛は髪型や衣裳の種類、色柄や織模様まで、公家の衣裳を忠実に再現した雛人形で、京で作られ、公家の間で愛好されました。和宮（第14代将軍徳川家茂正室）ゆかりの有職雛（図5）は、徳川宗家16代当主となった徳川家達から、長女松平綾子（越前松平家19代当主康昌夫人）と次女鷹司綏子の共有となったものです。

有職雛は、武家風の雛遊びが公家の生活に浸透していった宝暦頃から作られたようです。



図4 次郎左衛門雛 真龍院所用（成巽閣所蔵）文化5年（1808）文化5年3月、加賀藩12代藩主・前田齊廣の正室・隆子（真龍院）に、結婚後の初節句の際に贈られた次郎左衛門雛です。



図6 京製古今雛 三崎玉雲家伝来（当館蔵）江戸時代後期（18世紀）男雛51cm、女雛45cm 戦災や震災をくぐり抜けて、今日まで守り伝えられた貴重な京製の古今雛です。

江戸の古今雛はやがて京にも広まり、京風の古今雛を生み出しました。福井藩の藩医を務めた三崎玉雲家に伝わった古今雛（図6）は、高さ50cm程の大型のもので、女雛の衣裳は江戸風の古今雛と共通しますが、玉眼ではなく、描き目の柔軟な顔立ちをした京風古今雛です。

家伝では、三崎玉雲家10代当主（～寛政7年（1795））の代に特注して、京都から三国を経て福井へもたらされたと言います。

古今雛

古今雛は、安永（1772～81）頃から江戸で流行した雛人形で、現在の雛人形の原型と言われます。それまでの雛人形が京都主導であったのに対して、江戸で生まれた古今雛は、目にガラスや水晶をはめ込んだリアルな表現が特徴で、これは江戸日本橋十軒店の人形師・原舟月の創作と言います。また、女雛は唐衣裳の公家風の姿ですが、模様や装飾は有職の決まりを離れて、錦の裂を用いて刺繡を加えるなどして華やかさが際立ちます。

近代の復古調享保雛

同じく三崎玉雲家には、表現のよく似た3対の雛人形（図7）が伝えられています。目は玉眼で、女雛の衣裳は古今雛に似ていますが、男雛の衣裳は袖が角張った享保雛の形式に通じます。女雛の赤い袴や、袖口のピンクや紫色の刺繡糸には化学染料が用いられており、明治～大正（1868～1926）頃の作と判断できます。これらの雛の底には「京都／別仕立／二番」といった貼紙が貼られており、京都で作られたことがわかります。江戸風古今雛の玉眼を取り入れて、享保雛を復古した雛人形と考えられます。



図7 復古調享保雛 三崎玉雲家伝来（当館蔵）明治～大正時代（19～20世紀）男雛33.5cm、女雛24.5cm

【主要参考図書】

北村哲郎『日本の美術 人形』至文堂、1967年3月

切畠健『雛人形』京都書院、1998年6月

澤田和人「和宮ゆかりの雛と人形」『国立歴史民俗博物館』第128号、2005年1月

是澤博昭『決定版 日本の雛人形 江戸・明治の雛と道具六〇選』淡交社、2013年2月

三田覚之『東京国立博物館セレクション おひなさまと日本の人形』東京国立博物館、2016年2月

展示解説シート No.183

令和8年2月 日発行

福井市立郷土歴史博物館

〒910-0004 福井市宝永3丁目12-1
電話 (0776) 21-0489 FAX (0776) 21-1489

担当 佐々木佳美

印刷 (株)宮本印刷

今回の展示

企画展 福井藩の御用絵師・狩野元昭

令和8年4月17日（金）～6月7日（日）